

建設トツプランナー フォーラム in 豊田

■ 3 ■

陽子会長は当時を振り返った。

山は海の恋人。上流に住む人も、下流に住む人も自然環境を大切にすることが同じである。会では、上流の地域住民とともに工事現場や工場の水処理施設のパトロール、小中学生を対象とした、水環境を守るための天然せつけんづくりやエコツアー(自然観察会)などの環境啓発活動を実施している。こういった活動が功を奏し、矢作川は清流を取り戻しつつある。三河湾最大級の一色干潟にも、昔のように多くの海洋生物が生息し始めた。

こうした現状を見かねて立ち上がったのが地元漁協組合の主婦たちだった。「お父さんたちにはかり任せてはいけないへの陳情など、積極的に行動した」。1971年に若妻会を結成した。きれいな川、きれいにする会」の鈴木

愛知県一色町。愛知県の中南部に位置し、三河湾に面する人口2万4500人の町である。町全体が低地で、約80%が海抜ゼロメートルだ。全国有数のアサリの産地であり、ほかにもウナギやノリの良好な養殖地となっている。

しかし、昭和40年代前半からの上流部での宅地開発やゴルフ場開発、さらには工場の排水汚染などで、三河湾に注ぐ矢作川は白い水の「死の川」となった。三河湾も水質が急激に悪化し、珪砂(けいさ)へドロで汚染され、魚貝類は死滅寸前に陥った。



流域は一つの運命共同体

鈴木陽子・矢作川をきれいにする会会長

事例発表Ⅲ

森と水と生物多様性

環境への配慮は企業の責任

馬淵和三
山辰組社長



また、平水時のプールの水深が約20センチ、幅員も約80センチとなっているため、土砂や土石の堆積空間がなく、メンテナンスが従来のタイプと比較して容易になる。さらに、魚道本体をコンクリート製から鋼製にすることで、軽量化と工期短縮で、大幅なコスト削減を実現した。

「どんな魚でも上りやすい魚道を造れないものか」。1993年、山辰組(岐阜県揖斐郡大野町)の馬淵和三社長は、当時の建設省木曾川上流工事事務所から相談を受けた。棚田式魚道を開発するきっかけとなった。

馬淵社長は「省エネとエコに配慮した製品を開発することが、建設業に携わる企業の責任」と話した。道路、護岸擁壁工事に自然石を使用したフロックを開発したほか、水生生物に配慮した間伐材や現場発生品を有効利用したりサイクル型沈床工法を提言するなど、自然と共生し、環境に優しい建設企業づくりを進めている。

「環境保全には流域の理解と協力が必要。自然を実際に見て、触れ合っただけで、自然の大切さが分かる」。会はこころし、設立40年目となった。今後も鈴木会長を中心とし

た女性パワーが「流域は一つの運命共同体」を合言葉に、矢作川と三河湾の環境保全に向けて紅(くれない)の炎を燃やし続けることだろう。

従来の階段式魚道は上り口が1カ所しかなかった。通り過ぎた魚は行き止まりで滞留し、やがて力尽き、遡上(そじょう)できず、

この魚道の特徴は、縦断方向(川の流れの方向)より横断方向のこう配を急にして流れが集まるように工夫したことだ。流れが少なくなった場合、床面直下の集水溝から呼び水を流下できるなど、流量変化に対応できる。

然と共生し、環境に優しい建設企業づくりを進めている。(建設新聞社(仙台) 川小島義弘)